令和5年度1学期終業式「訓話」（令和5年7月25日）

新潟県立長岡高等学校長
鈴　木　勇　二

１　はじめに

１学期の始まった４月は、山々はやっと薄緑色に色づいてきた頃でしたが、１学期が終わる今は、山々は濃い緑に覆われています。３ヶ月という短い時間の中で、木々は大きく力強く成長しています。こういった自然の変化を思うと、長岡高校でたくさんの経験をして成長していく皆さんと重なり、嬉しい気持ちになります。

２　１学期を振り返って

さて、１年前のこの時期、新型コロナウイルスが猛威を振るっていました。その後も感染は収まらず、昨年度は学校行事等に大きな影響を与えました。そのような感染症も今年度に入ってからようやく落ち着きを見せ、学校での教育活動はコロナ前の状況に近づきつつあります。１年間で大きく状況が変わったわけですが、皆さんにとって、今年の１学期はどのような１学期でしたか。１学期の主な出来事をまとめましたので、話を聞きながら、各自、振り返ってください。

はじめに、４月６日、始業式と入学式があり１年生の長高生としての生活が始まりました。４月18日には３年理数科の課題研究発表会行われ、後日、技科大学長賞が決定しました。選ばれた班の皆さん、これからの発表、頑張ってください。４月21日には、２，３年生が昨年に引き続きクラス単位でのバス遠足に行きました。楽しんでもらえたでしょうか。地区大会の後、５月11日から中間考査、１年生にとっては初めての定期考査でした。中学とはレベルが違い戸惑った人もいたことでしょう。５月下旬からの県総体、先日あった野球部の夏の大会では、３年生を中心に全力を出し切ってくれたと思います。体育祭は、６月７日に、保護者等の多くの観客に応援されての開催となりました。今年度の聖火点灯は、スーパーマリオ、独特の間の取り方が面白かったですね。先ほど表彰があった第一部会も、盛り上がっていました。

昨年もお話ししましたが、こういった活動をとおして、皆さんは、新しいことに挑戦するときの緊張感や楽しさ、やり遂げた後の充実感、うまくいかなかったときの挫折感など、人として成長していくために必要な多くのことを学んでいきます。ただし、それは全力で取り組むからこそ得られるもの。何事も前向きに、積極的に、失敗を恐れずに全力で取り組んで欲しいと思います。

さて、こういった行事が毎日行われているわけではありません。皆さんの学校生活の大半は、授業における学習活動です。その時間を大切にすることは、高校生活を大切にすることと同じです。一日一日の積み重ねを大切にしていきましょう。

３　読書について

ここのところ、読書のペースが落ちています。隙間(すきま)時間を使っての読書なので思うように進まないでいる状況です。そんな中、この１学期、「心揺さぶられる」というと少し大げさですが、感動的な小説に出会うことができました。伊吹有喜(ゆき)さんの『犬がいた季節』です。『ミッドナイト・バス』という映画を知っている人はいますか。５年くらい前に公開された映画で新潟と東京を舞台にした物語で、それも伊吹有喜さんが書いたものです。

さて、『犬がいた季節』は、高校に迷い込んだ犬が、生徒会と美術部の生徒の力を借りてそのまま高校に居着くところから始まります。物語は、その時々の高校生を中心に進んでいきますが、10年以上も居候を続けるコーシローと名付けられた犬を通して、何代にもわたる高校生がつながっていきます。時代は昭和から平成にかけてで、皆さんにとっては昔の出来事と受け止められてしまうかもしれませんが、いつの時代も、15歳から18歳の若者が抱える夢や希望、不安、もやもや感は変わりません。物語の第２話、第３話に出てくる高校生は、ちょうど皆さんのお父さん、お母さんの年代かと思います。書店の店員さんのコメントがいくつかありました。そのうちの一つに「読み終えた後、じっくりとかみしめたくなる物語でした。悩みながらも、揺らぎながらも自分の問題を自分で考え、自分で決める高校生達の姿に励まされました」というのがありました。皆さんを勇気づけ、元気づけてくれる一冊だと思います。手に取って読んでみてください。

次に、今読んでいるのが朝井まかてさんの『ボタニカ』です。日本植物学の父といわれる牧野富太郎の人生を描く小説です。今、ＮＨＫの朝ドラで神木隆之介や浜辺美波が出演

する「らんまん」というのをやっていますが、これも牧野富太郎を題材にしたドラマであることから『ボタニカ』も注目を集めています。実際に小説を読んでみると、牧野富太郎博士の人生はテレビドラマよりもよほど破天荒で驚かされます。江戸時代から明治へと変わる頃、小学校すら卒業していない富太郎が大学教授と対等に研究を進めていくことができたのは、富太郎の植物に対する人並み外れた強い情熱はもちろんのこと、富太郎を支える人たちが周りにいたからであるということがわかります。読み始めは少し退屈かもしれませんが、読み進めていくうちに読むスピードが上がってきます。ところで、「ボタニカ」とは何でしょうか。物語の始まりのあたりに書いてありますよ。

２冊ほど紹介しましたが、どのような本に興味を持つかは、その人の経験やそのときの気持ちに負うところが大きいように思います。以前お話しした「目が合った本」というのも、経験からくるインスピレーションのようなものであると思います。この夏、皆さんが、素敵な本と出会うことを期待しています。

４　おわりに

一昨日、ジャガイモの収穫をしました。近所に住む双子の男の子とその両親に声をかけ、朝の早いうちに一緒に掘りました。男の子たちはお父さん、お母さんとに分かれて掘っていました。バッタが出てきたり、蛙が出てきたり、ダンゴムシが出てきたり、ヨド（コガネムシの幼虫です）が出てきたりと、子供達にとっては楽しい時間だったようです。スーパーに並んでいるジャガイモではなく、畑から収穫するという作業、本校の教育で言えば「本物に触れる機会」といえると思います。こういった体験が、将来、何かの役に立つかもしれないと思いながら、親子の様子を見守っていました。

いよいよ明日から３０日間の夏休みです。受験勉強や部活動、行事に忙しいかもしれませんが、普段の生活よりも自分の時間をとる余裕はあると思います。その時間を利用して海外に出かける人もいるようですね。そこでしか体験できないことを思いっきりやってきてください。海外でなくとも「本物に触れる機会」はたくさん作れます。いろいろ計画して、今しかできない体験をしてみてください。

熱中症対策を徹底しつつ、暑い夏を楽しみましょう。

以上で訓話を終わります。